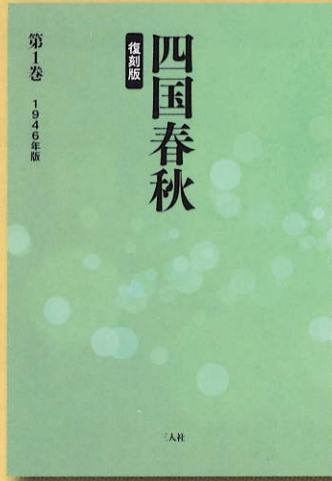


四国春秋

復刻版
全6巻・別冊1

四国新聞社発行 1946年～1950年

四国文化の昂揚と民主化の達成を目的とし、著名な学者、作家、評論家、芸術家などの寄稿を受けるとともに、四国の歴史や伝統、観光スポットなどの紹介にも力を注ぎ、四国全体の地域ステータスを高めた総合文化雑誌を復刻！



戦後の
地方新聞・
雑誌シリーズ
2

占領期の歴史・メディア・世相に加えて、
文学・文化運動、および地域研究の基礎資料！

- 主要執筆陣
- | | | |
|-------|-------|--------|
| 秋田 実 | 北町 一郎 | 田中 英光 |
| 安倍 能成 | 木村 莊十 | 田畑 忍 |
| 天野 忠 | 栗林 貞一 | 田宮 虎彦 |
| 荒 正人 | 小山いと子 | 壺井 繁治 |
| 生田 花世 | 式場隆三郎 | 坪田 譲治 |
| 宇井 無愁 | 重森 三玲 | 妻木 新平 |
| 海野 十三 | 柴田錬三郎 | 堂本 印象 |
| 大庭さち子 | 積 迢空 | 十返 肇 |
| 大原 富枝 | 庄野 潤三 | 長沖 一 |
| 大宅 壮一 | 新村 出 | 中川 一政 |
| 大山 定一 | 末川 博 | 中河 与一 |
| 荻原井泉水 | 杉浦 明平 | 中村 直勝 |
| 小野十三郎 | 杉浦 幸雄 | 中村武羅夫 |
| 笠置シヅ子 | 須田国太郎 | 南原 繁 |
| 嘉治 隆一 | 千 宗室 | 新居 格 |
| 川田 順 | 高浜 虚子 | 丹羽 文雄 |
| 木々高太郎 | 高浜 年尾 | 土師 清二 |
| 菊池 寛 | 瀧川 幸辰 | 長谷川幸延 |
| 岸本 水府 | 竹中 郁 | 長谷川 伸 |
| | | 初山 滋 |
| | | 浜本 浩 |
| | | 林 房雄 |
| | | 藤沢 桓夫 |
| | | 古谷 綱武 |
| | | 北条 誠 |
| | | 美川 きよ |
| | | 三岸 節子 |
| | | 武者小路実篤 |
| | | 村山 知義 |
| | | 本山 荻舟 |
| | | 山口 誓子 |
| | | 山口 青邨 |
| | | 山手樹一郎 |
| | | 山本周五郎 |
| | | 横溝 正史 |
| | | 横山 泰三 |
| | | 吉井 勇 |

◎ 解題 石川 巧
◎ 推薦 坪井秀人・西川祐子・福間良明
◎ 揃価格 108,000円+税 全3回配本
◎ 刊行 2015年11月刊行開始

三人社

四国春秋 1946年4月～1950年7月(全55号)

限定70部

第1回配本	第1巻	1946年版	312頁	本体 36,000円+税 ISBN978-4-908147-39-5	2015年 11月刊行
	第2巻	1947年版	496頁		
	別冊	解題・総目次・ 執筆者索引	約 100頁		
第2回配本	第3巻	1948年版	508頁	本体 36,000円+税 ISBN978-4-908147-43-2	2016年 4月刊行
	第4巻	1949年版①	262頁		
第3回配本	第5巻	1949年版②	262頁	本体 36,000円+税 ISBN978-4-908147-46-3	2016年 9月刊行
	第6巻	1950年版	260頁		

刊行予定 全3回配本 各巻 本体18,000円+税
※原本提供 石川巧所蔵原本・他

- ◎ 解題 石川巧(立教大学文学部教授)
◎ 巻数 全6巻+別冊1
◎ 体裁 B5判・上製・総約2,100頁
◎ 別冊 解題・総目次・執筆者索引
◎ 推薦 坪井秀人(国際日本文化研究センター教授)
西川祐子(文学・女性史研究者)
福間良明(立命館大学産業社会学部教授)



戦後の地方新聞・雑誌シリーズ

戦後の地方新聞・雑誌シリーズ1
石見タイムズ社刊「1946年～1958年」
石見タイムズ 全11巻・別巻1
解題 吉田豊明・井上厚史・道面雅量
体裁 A3判 上製 総約4,000頁
揃定価 360,000円+税 全4回配本
2014年12月～2016年5月刊行【復刻版】

本紙は小島清文という弱冠27歳の青年によって創刊された。彼は戦争に学徒兵として出陣し、戦艦「大和」の暗号士官となり、その後ルソン島のジャングルで米軍と闘ったが、飢えと熱病に悩まされた後に部下3名を引き連れて白旗を掲げて投降した人物である。戦後の農村の向上、市民の市政参加や教育・福祉の充実、男女同権や反戦平和など、高い理想を掲げた伝説の地方紙を通して、山陰の辺境の行政と文化、そして人々の生活の足取りを検証する。

● 推薦 山輝雄・内海愛子・庄司俊作・竹永三男

戦後の地方新聞・雑誌シリーズ3
新潟日報社刊「1946年～1949年」
月刊にひがた 全6巻・別冊1
解題 大原祐治
体裁 B5判 上製 総約1,724頁
揃定価 108,000円+税 全3回配本
2015年11月～2016年10月刊行【復刻版】

本誌は敗戦直後に新潟日報社から郷土文化の昂揚をめざし、新日本文化建設に力を注いだ総合雑誌である。新潟日報社の当時の社長は坂口安吾の実兄、坂口敏吉。多彩な作家陣(大宅壮一、会津八一、高見順、坂口安吾、市川房江、式場隆三郎、邦枝完二など)の執筆に加えて政治、経済、社会、娯楽、投稿面が充実。占領期の新潟の戦後文化をうかがう重要文献として復刻。

● 推薦 田中励儀・坪井秀人・七北数人

三人社

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369
振替 00960-1-282564

※図書館様・書店様へ
小社は少数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

地方雑誌の戦後的可能性

国際日本文化研究センター教授

坪井秀人

戦後の地方新聞・雑誌シリーズを推薦します

敗戦直後に刊行された地方雑誌については二つの点からその意義を考えることが出来る。

第一に、この時期に東京など中央の出版が停滞を強いられていた状況が地方での出版の復活をもたらししたこと。このことは、この時期の地方出版のメディアが地方限定の狭い志向をこえてある種の普遍性を獲得することに繋がっている。今回復刻される『月刊にひがた』『四国春秋』などの雑誌はいずれも地方新聞社から刊行されているが、大宅壮一（『開戦責任』『敗戦責任』の形で戦争責任の問題を論理的に整理）や石川達三、京大に復帰して間もない瀧川幸辰（『一億総懺悔』の主張を徹底批判）など、中央とのパイプを利用して著名な執筆陣を創刊号から揃えていて壮観である。内容的にも婦人参政権など喫緊の課題に取り組んでおり、これらの地方雑誌が地方と中央という構図を溶解させる意気に溢れていたことがわかる。『月刊にひがた』では久米正雄率いる鎌倉文庫との関係から高見順を連載小説執筆に引き摺りだしている。

第二に、さりながら、やはり戦後の出発にあたって地方がかかえる固有の問題性が、これらの雑誌に深い陰翳を与えていることである。その一例として『月刊にひがた』一巻三号に掲載された坂口安吾の「地方文化の確立について」を挙げることができる。兄が同誌版元の新潟日報社社長を務める関係があるものの、同誌の中で安吾の存在は目立たない。けれどもこの文章は地方の風土の排他性をきびしく批判するとともに「東京の垂流となるな」と注文をつけて、単に痛快一本槍でない複雑な地方文化批判となっている。同誌同号には政界に打って出る直前の田中角栄が経営する田中土建工業が一面広告を出している。広告に題して「文化日本の創建」。地方文化創造の息吹と未来の問題の先取りにおいて、ここで安吾と角栄が並んでいることはいかにも象徴的なのである。

地方メディア文化の多様性

立命館大学産業社会学部教授

福岡良明

終戦後、用紙統制のかたわら、地方ではさまざまな文化誌が立ち上げられた。広島であれば『中国文化』『郷友』などが知られるが、四国圏を代表するのが、一九四六年四月創刊の『四国春秋』である。

『四国春秋』は、香川日日新聞の流れを汲む四国新聞社によって発行された。もともと香川県紙であった同紙が四国全域のローカル紙をめざそうとするなか、『四国春秋』も四国において広く手にされる雑誌となった。地方雑誌でありながら最盛期には三万部を上回り、一九五〇年六月号まで四年以上にわたって、計五五号が発行された。戦後初期の地方雑誌は二年ほどで廃刊となるものがほとんどであり、先の『中国文化』『郷友』も例外ではない。『四国春秋』の地域におけるインパクトがうかがえる。

執筆陣も多彩である。地域の文化人やジャーナリストはむろんのこと、錚々たる中央文化人の寄稿も少なくない。ざっと目次を眺めただけでも、東大総長の南原繁や第一高等学校長・学習院長を歴任した安倍能成のほか、瀧川幸辰・末川博・佐々木惣一ら京都文化人、壺井繁治、田宮虎彦、荒正人、林房雄などの文学関係者、評論家の嘉治隆一・大宅壮一らによる寄稿が目につく。扱うテーマも、政治・経済から、文学・映画・教育、さらには、カストリ雑誌を想起させる性愛記事まで、多岐にわたる。

四国を拠点にしながらも地域の書き手に閉じることなく、かといって、中央論壇の一方的な輸入に留まるわけでもない。両者を融合しながら、さまざまな領域にわたって、多様な議論や嗜好を生み出そうとする。こうした意志が、そこには透けて見える。その意味でも、雑誌メディアの「雑」多性を体現するものでもあった。四国文化史の研究にとどまらず、戦後の地域メディア史の多様性をつかむうえでも、きわめて有意義な資料である。

内容見本

戦争と遵法精神

瀧川 幸辰

本書を推薦します。

文学・女性史研究者

西川祐子

戦時体制下の日本は、戦争と法との関係について、法は戦争のための手段であり、戦争は法の正統性を根拠とするものである。この考え方は、戦時体制下の日本に特有のものである。法は戦争のための手段であり、戦争は法の正統性を根拠とするものである。この考え方は、戦時体制下の日本に特有のものである。

ざくろ

山本周五郎 (絵) 大雅 居二介 (絵)



待つ人

柴田錬三郎 (絵) 伊谷賢藏 (絵)



高松の棧橋

生田花世



焼土は蘇入る

四国縣都の復興行脚記

阿波の秋

荻原井泉水

阿波の秋 荻原井泉水

伊豫緋の女

村田修子



土佐の民権女性

橋詰延壽

土佐の民権女性 橋詰延壽